

2018 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	教授	伊藤 龍仁
最終学歴	学 位	専門分野
日本福祉大学大学院社会福祉学研究科修士課程修了	修士	社会的養護

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

各教科の授業改善を継続し、本学の建学の精神を具現化するための教育活動に取り組むことを目標とする。その中で重点科目は保育実習指導科目である。

(計画)

- ①講義系科目はブリーフ・レポートの導入と小テスト方式を採用したアクティブ・ラーニング型授業に取り組む。
- ②保育実習指導系授業は、学生の実践力及び実習への対応力向上のためサービス・ラーニングへの参加を義務付けるとともに、ロールプレイや意見発表等に取り組ませる。
- ③ゼミナール系授業においては少人数できめ細やかな個別指導を重視する。専門演習では地域連携活動を授業の柱に据え、保育者に求められる資質と実践力向上を図る。

○担当科目（前期・後期）

（前期）保育実習事前指導ⅠB、児童家庭福祉、社会福祉概論、サービス・ラーニング実習Ⅰ、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）社会的養護、社会的養護内容、保育実習指導ⅠB、保育実習Ⅲ事前事後指導、サービス・ラーニング実習Ⅱ、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、保育実習ⅠB、保育実習Ⅲ、卒業研究

○教育方法の実践

- ①講義系科目はブリーフ・レポートの導入と小テスト方式を採用したアクティブ・ラーニング型授業に取り組んだ。
- ②保育実習指導系授業は、学生の実践力及び実習への対応力向上のためサービス・ラーニングへの参加を義務付けるとともに、ロールプレイに取り組ませ、実習の準備を行った。
- ③専門演習では地域連携活動を授業の柱に据え、保育者に求められる資質と実践力向上を図った。基礎演習は学生の初年次教育と交流活動、課題研究と発表に取り組ませた。

○作成した教科書・教材

- ・各回の要約を資料として印刷するとともに各科目に必要なワークシートの作成を行った。
- ・「サービス・ラーニング実習」のテキスト『サービス・ラーニングハンドブック』の作成を学科教員と協力して行った。

○自己評価

- ・本年度の教育活動は、アクティブ・ラーニング型の授業運営を強化しながら取り組み、概ね目標を達成したと考える。

II 研究活動

○研究課題

・家庭養護の構造と機能に関する研究（仮）」を研究テーマに据え、①ファミリーホームの危機対応の調査・研究、②スリランカの社会的養育に関する調査・研究を今年度と研究課題と設定する。今年度は博士論文執筆に向けた2年計画の1年目と位置づける。

○目標・計画

（目標）

- ①研究成果を論文にまとめて査読誌（社会福祉学など）に投稿する。
- ②研究成果を論文にまとめて東邦学誌に投稿する。

（計画）

- ①文献調査に加え、複数の里親・ファミリーホームへの訪問調査を実施して分析する。
- ②文献調査に加え、スリランカの施設・教育機関への訪問調査を実施して分析する。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・白井克尚・今津孝次郎・伊藤龍仁・堀篤実・伊藤数馬・梶浦恭子・新實広記・橋村晴美（2019）サービス・ラーニング委員会編『「サービス・ラーニング」ハンドブック 第5版』, P17, 愛知東邦大学教育学部子ども発達学科.
- ・今津孝次郎・西崎有多子・白井克尚・中島弘道・新實広記・伊藤龍仁・柿原聖治・伊藤数馬（2019）愛知東邦大学地域創造研究所編『地域創造研究業書 No. 30 教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の実践研究』, 73-74, 唯学書房.
- ・浅沼裕治・天池洋介・荒井和樹・有尾正子・伊藤龍仁・岩田正人・大谷誠英・金本秀韓・小塚光夫・佐々木将芳・田中高久・谷村和秀・中島健一郎・中村明成・藤林清仁・松岡宏明・松木宏史・武藤敦士・山崎ひろ・吉田祐一郎・吉野真弓・吉村美由紀・吉村譲（2017）喜多一憲監修, 堀場純矢編『みらい×子どもの福祉ボックス 児童家庭福祉』106-123, みらい.
- ・浅沼裕治・荒川まゆ・伊藤龍仁・井上穂乃日・岩崎元彦・岩田正人・加藤潤・加藤智功・倉橋幸彦・小菅ゆみ・児玉あい・児玉俊郎・近藤日出夫・佐々木将芳・関貴教・隣谷正範・橋本喜予・橋本達昌・藤田哲也・藤林清仁・古田優佳・宮地菜穂子・武藤敦士・安田華子・吉田祐一郎・吉田幸恵（2017）喜多一憲監修, 堀場純矢編『みらい×子どもの福祉ボックス 社会的養護』10-28, みらい.
- ・丹羽咲江・萬屋育子・伊藤龍仁・明石雅世・涌井規子・谷口由希子・多久島睦美・加藤久美子・賀屋哲男・竹村万知子・小島祥美・本岡恵・小島俊樹・幸伊知郎・安藤ふみ・田中弘美・荒井和樹・加藤正志・小池田忠・岡本祥浩・重原惇子・渡邊ゆりか・藤田榮史（2016）特定非営利法人子ども&まちネット編, 藤田榮史監修『なごや子ども貧困白書』20-24, 風媒社.
- ・藤園秀信・打保由佳・川田誉音・飯塚哲男・伊藤龍仁・榎原直美・大井智香子・加藤大輔・五味保教・杉浦真生・須藤昌寛・高橋洋介・谷口真由美・福嶋正人・福田洋一郎・藤森一浩・山口みほ・吉田祐一郎（2016）中部学院大学通信教育部監修, 藤園秀彦・打保由佳・川田誉音編『社会福祉相談援助演習 ソーシャルワークの理論と実践をつなぐ』156-162, みらい.
- ・今津孝次郎・新實広記・西崎有多子・柿原聖治・伊藤龍仁・白井克尚（2015）『「サービス・ラーニング」ハンドブック 第1版』愛知東邦大学教育学部子ども発達学科平成26年度「基礎演習」担当教員団編, 愛知東邦大学教育学部子ども発達学科.（年度毎に新版発行）
- ・安形元伸・浅野壽枝・伊藤貴啓・伊藤龍仁・伊藤文人・岩田正人・遠藤由美・蛭沢光・大久保稔・小川英彦・加藤智功・金田敦子・上鹿渡和宏・黒川真咲・小塚光夫・斉藤理紗・澤田和夏・清水

真一・鈴木二光代・関貴教・高松暁子・中村強士・永井健・西川信・藤原桂子・藤田哲也・堀場純矢・山口薫・安田華子・湯原悦子・吉村美由紀・吉村譲（2013）堀場純矢編『子どもの社会的養護内容—子ども・職員集団づくりの理論と実践』, 115-121, 福村出版.

- ・飯島優子・石川京子・伊藤龍仁・大坪勇・大藪元康・神戸賢次・新川泰弘・丹羽正子・松木宏史・松島京・宮内康彦・山本伸晴『新選 社会福祉第2版』(2013) 後藤卓郎編, みらい, 2013年.
- ・片桐多恵子・鈴木恒一・沖中秀子・伊藤龍仁・岡田康子・志村真・安藤恭子・ダーリンズル規子・有川一・白幡久美子(2011) 中部学院大学短期大学部幼児教育学科編集委員会編『五感で感じる遊びの価値を広げる保育者養成プログラム』, 17-31, ヤツウメ印刷.

(学術論文)

- ・伊藤龍仁(2018)「ファミリーホームの人材確保と育成について」『子どもと福祉』(11) 26-29, 明石出版.
- ・伊藤龍仁(2018)「新ビジョンよ何処へ行く」『社会的養護とファミリーホーム』(8) 32-40, 創英社.
- ・浅井彰子・伊藤龍仁(2017)「乳幼児の言葉の発達と絵本の楽しみ〜「親子で絵本を楽しむ会」の取り組みを通して〜」『東邦学誌』(46-2), 113-125, 愛知東邦大学.
- ・伊藤龍仁(2016)「特別企画 ファミリーホームと地域小規模児童養護施設—どこがどう違うのかまとめにかえて—ファミリーホームとは何かを考えるために」『社会的養護とファミリーホーム』(7) 118-121, 福村出版.
- ・伊藤龍仁(2015)「家庭養護に関する政府定義の再考—里親制度の歴史を踏まえて—」『東邦学誌』(44-2) 49-67, 愛知東邦大学.
- ・伊藤龍仁(2015)「ファミリーホームと石井十次—その遺志と実践を受け継ぐために」『社会的養護とファミリーホーム』(6) 128-133, 福村出版.
- ・今津幸次郎・正岡元・大勝志津穂・照屋翔大・伊藤龍仁(2015)「スマートフォン等の利用に関する実態—愛知東邦大学1年生と東邦高校全生徒」『東邦学誌』(44-1) 193-210, 愛知東邦大学.
- ・今津幸次郎・新實広記・西崎有多子・柿原聖治・伊藤龍仁・白井克尚(2015)「教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の試み」『東邦学誌』(44-1) 211-231, 愛知東邦大学.
- ・伊藤龍仁(2014)「家庭的養護の推進と地域子育て支援に関する一考察」『東邦学誌』(43-2), 117-126, 愛知東邦大学.
- ・伊藤龍仁(2014)「ファミリーホーム制度と実践の充実を求めて—第8回ファミリーホーム全国研究大会を終えて」『社会的養護とファミリーホーム』(5) 25-30, 福村出版.
- ・伊藤龍仁(2012)「「家庭養護」を担うファミリーホーム制度の充実を求めて〜第8回ファミリーホーム全国研究大会における議論から〜」『福祉研究』(107) 33-42, 日本福祉大学社会福祉学会.
- ・伊藤龍仁(2012)「第2章 保護を必要とする子どもの家族と子育て支援」『「条件不利家族」を対象とした子育て支援ネットワークの類型化と評価指標の開発』23-33, 2009-2011(平成21-23)年度 文部科学省科学研究費補助金基盤研究C研究成果報告書.
- ・伊藤龍仁(2012)「震災被災地で課題を抱える子どもたちに関する調査報告(第一報)〜避難所となった児童養護施設で暮らす子ども達〜」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要』(13) 133-143, 中部学院大学総合研究センター. (査読誌)

(学会発表)

- ・伊藤龍仁(2019年2月28日)「日本の少子化・子どもの貧困・虐待問題」『少子高齢社会における日中の子どもの健康と福祉のこれからを考える』愛知東邦大学地域創造研究所・複旦大学人口研究所共催研究例会報告(中華人民共和国, 上海複旦大学).

- ・伊藤龍仁（2018年10月6日）「家庭養護における「公」と「私」の相互関係とバランスーフAMILYホームの措置委託と措置解除に着目してー」日本福祉大学大学院博士課程論文構想発表会.
- ・伊藤龍仁（2016年2月27日）「ファミリーホームの自立支援計画」『2015（平成27）年度ファミリーホーム東海・北陸・静岡ブロック協議会研修会（愛知東邦大学）』実践報告.
- ・伊藤龍仁（2016年2月18日）「家庭養護寮の歴史的再評価ー日本における小集団家庭的養護の歴史」『日本福祉大学大学院社会福祉理論史研究会2月定例会（日本福祉大学）』研究報告.
- ・伊藤龍仁（2014年7月5日）「里親・ファミリーホームにおける子育て支援という課題」『東海社会学会第7回大会（愛知県立大学）』一般報告部会（B）口頭発表.
- ・伊藤龍仁（2014年6月29日）「ファミリーホームにできること・できないこと」『第43回全国児童養護問題研究会全国大会（愛知大会・ウィルあいち）』第7分科会報告.
- ・伊藤龍仁（2013年11月8日）「e-chubu 導入からこれまで」『名古屋大学高等教育センター主催セミナー FD・SD 教育改善支援拠点事業「ポートフォリオが学習支援に活用されるための条件」（名古屋大学）』シンポジウム報告.
- ・伊藤龍仁（2012年4月22日）「震災被災地で避難所となった児童養護施設で暮らす子ども達に関する調査報告」『日本社会福祉学会中部部会2012年度研究例会（日本福祉大学）』自由研究口頭発表.
- ・伊藤龍仁（2011年9月18日）「保育士養成校のeポートフォリオを活用した学習支援に関する考察ー「e-chubu」導入1年後の現状と課題ー」『日本教育工学会（首都大学東京）』自由研究分科会口頭発表.

（その他）

<講演>

- ・伊藤龍仁（2019年3月23日）「里親制度の可能性を考えるーファミリーホームの実践をとおしてー」なくそう！子どもの貧困ネットワークあいち連続学習会（31）（名城大学ナゴヤドーム前キャンパス）.

<評論・エッセイ等>

- ・伊藤龍仁（2019）取材記事「「公私混同」「距離感無し」の降りていく子育ての必要性」『社会的養護とファミリーホーム』（9），創英社.
- ・伊藤龍仁（2016）「里親・ファミリーホームの現状と課題」『平成28年度 大学生・青少年指導者・施設職員対象の「指導者養成講座」講義レジメ集』，51-52，NPO 法人「こどもサポートネットあいち」.
- ・伊藤龍仁（2016）.「特別企画 ファミリーホームと地域小規模施設ーどこがどうちがうのか 鼎談 特別企画の取材を終えてーファミリーホームの課題を考える」『社会的養護とファミリーホーム』（7），90-95，福村出版.
- ・伊藤龍仁（2015）「社会的養護にかかわる平成27年度予算の衝撃」『社会的養護とファミリーホーム』（6）8-11，福村出版.
- ・伊藤龍仁（2014）「ファミリーホームにできること・できないこと 制度と実践から考える」『朋2014年』（5）10-13，愛知県児童福祉施設長会.
- ・伊藤龍仁（2013）「子どもの「最善の利益」を保証できるファミリーホーム制度を目指して」『親和会通信』，名古屋市親和会
- ・伊藤龍仁（2013）「里親になって思うこと」『ラルーラ通信』，中部学院大学子ども家庭支援センター.

<書籍編集委員>

- ・日本ファミリーホーム協議会『社会的養護とファミリーホーム』，創英社，2014 年以降今日に至る．
- ・保育福祉小六法編集委員会『保育福祉小六法』，みらい，2010 年以降今日に至る．

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

なし

○所属学会

- ・社会事業史学会
- ・東海社会学会
- ・日本福祉大学社会福祉学会
- ・日本社会福祉学会
- ・全国児童養護問題研究会

○自己評価

- ・今年度の研究活動は、一部に計画の遅滞等が見られ、計画通りには進まなかった部分がある。特に、博士論文に関する研究計画を大幅に見直す必要が生じたための遅滞があった。また、予定したスリランカ研究が中国上海市の調査に変更され、研究計画の変更につながった。研究成果に関しては一定の成果を上げることができたが、論文誌への投稿が不十分な点に課題が残る。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

（目標）

学内委員会活動と教育学部における学科運営を中心に職責を果たして大学運営に協力する。高大接続及び広報業務等への協力依頼がある場合にはできる限り協力していく。

（計画）

- ①人権問題委員会委員長として委員会を運営し、学内の人権問題に対応するとともに教職員・学生に対する人権意識の向上を図る。
- ②入試委員会委員として委員会活動に参加し、オープンキャンパスや入試業務等の職責を果たす。
- ③学生募集戦略委員会委員として委員会活動に参加し、与えられた職責を果たす。
- ④教育学部学科教員の一人として学科会議及び保育士等養成課程委員会に参加しながら与えられた職責を果たす。

○学内委員等

学生募集戦略委員会委員、人権問題委員会委員長、入試委員会委員、幼小教職委員会委員、保育士養成課程委員会委員

○自己評価

- ・今年度の大学運営に関しては概ね目標を達成したと考える。特に、今年度から就任した人権問題委員長として困難事例に対応して職責を全うした。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

（目標）

本学教授という地位にふさわしい社会貢献活動を展開することが本年度の目標である。

（計画）

- ・本年度は、ファミリーホーム事業、名古屋市親和会（里親会）役員活動等を中心とした名古屋市児童福祉事業への貢献、名古屋市、岐阜県、瑞穂市等が主催する研修・講習会等への協力、社会福祉法人桜友会評議員、日本ファミリーホーム協議会機関誌編集委員として社会貢献に取り組む。

○学会活動等

- ・社会事業史学会が発行予定の社会事業辞典（予定）への分担執筆依頼を受けて原稿を執筆した。
- ・全国児童養護問題研究会より、次年度全国大会シンポジストとしての参加依頼を受けるとともに、
- ・次年度発行予定の出版物への執筆依頼を受けた。

○地域連携・社会貢献等

- ・日本ファミリーホーム協議会機関誌編集委員会活動、名古屋市の里親及びファミリーホーム事業、名古屋市のびのびサポート子育て支援事業（ファミリーサポートセンター事業）研修会講師、瑞穂市子育て支援員研修会講師、および社会福祉法人桜友会評議員、児童心理治療施設桜学館苦情解決第3者委員としての地域・社会貢献を行った。
- ・新たに、名古屋市社会的養育推進計画会議に委員として参加した。

○自己評価

今年度の社会貢献活動は目標を十分達成し、当初の計画以上の取り組みを行った。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

- ・愛知東邦大学地域創造研究所の一員として上海復旦大学人口研究所との研究交流活動に参加した。
- ・愛知県社会福祉協議会より児童福祉活動への貢献に対する感謝状を贈呈された。

VI 総括

- ・今年度は、教育活動、大学運営、社会貢献については概ね目標を達成したといえる。一方で、研究活動が不十分な結果に終わった印象がある。今年度の課題を踏まえて次年度の計画を立案したい。

以 上